【修士論文要旨】

アセクシュアル自認男性における葛藤
―男らしさと強制的性愛規範の不可視性に着目して―

関口 麗美 *

研究概要

本研究では，他者に性的魅力を感じないアセクシュアルを自認する男性 4 名にインタビュー調査を実施した．そして，彼らの葛藤の経験に焦点を当て，その背景にある社会的規範の不可視性について考察を行った．その結果，先行研究（吉岡 2019）と同様に，アセクシュアルの自認にいたるまでの第 1 段階として，周囲の価値観に対して疑問や違和感を抱く経験があることが明らかになった．また，今回は調査対象者の条件と人数が限られていたため，アセクシュアル当事者が自認に至るまでに同じような経験をするのかは不明瞭であるが，筆者が聞き取りを行った当事者男性は，いずれも，誰もが性愛に関する共通認識を持っているという社会規範を意味する「強制的性愛」に基づく規範を，アセクシュアル特有の経験として認識していることがわかった．

また，アセクシュアル自認男性の経験から，性的欲望や恋愛願望が個人に備わっている前提で話が進められたりするなどのエピソードがいくつか出てきた．これは，ヘテロセクシズム・強制的性愛に基づく規範が不可視化されている現状を示しており，本人の意向や意思にかかわらず，最悪の場合，性行為を望まない人が通過儀礼的に性的被害に遭う可能性が考えられる．

そして，今回行った聞き取りからは，男性性への葛藤を経験したことが，アセクシュアルの自認に至る要因のひとつになっているとは限らないとわかった．その一方で，調査前には想定していなかった課題もいくつか明らかになった．例えば，西洋圏で暮らす男性とアジア圏で暮らす男性に何らかの文化的な差異が存在する可能性があること，そして男性というジェンダー規範についても，強制的性愛やヘテロセクシズムと同様に不可視化されていることである．後者については，性的な事柄への関心がないことが「草食」「奥手」などの性格に結びつけて捉えられている可能性も示唆しており，今後アセクシュアルをどのように世間が理解し受容していくのか検討する必要がある．

論文の構成と各章の概要

はじめに――本研究の目的と論文の構成

第 1 章 アセクシュアル概念の発展と議論

* 本学大学院博士前期課程 人間科学研究科人間社会科学専攻 2022 年度修了

1-1. セクシュアル・マイノリティの抵抗運動と構築主義的研究
1-2. アセクシュアル概念の発展と定義
1-3. 強制的性愛概念の概要とジェンダーの関連性

第 2 章「男性」とアセクシュアリティ
2-1. 男性性に関する問題の所在
2-2. アセクシュアル男性の自認と困難：Plzybylo(2014) による研究事例

第 3 章 アセクシュアル自認男性の経験と葛藤の有無
3-1. 調査対象者のプロフィールと一覧表
3-2. 自認のきっかけと強制的性愛への違和感
3-3. パートナー願望
3-4.「男らしさ」への葛藤
3-5. カミングアウト
3-6. アセクシュアル・コミュニティへの参加

第 4 章 アセクシュアル自認男性の葛藤
4-1. 自認過程とコミュニティ参加にみる性的指向としてのアセクシュアルの役割
4-2. 不可視化されたヘテロセクシズム
4-3. アセクシュアル自認過程における男性性への葛藤

おわりに――結論と今後の研究の展望

はじめに――本研究の目的と論文の構成

近年，セクシュアリティやジェンダーに対する認識の広がりから，性的指向（sexual orientation）にかんして，いわゆる LGBTQ だけに留まらない多様な定義があるとの議論がされている．その中には，他者に性的な魅力を感じないアセクシュアルも含まれる．

アセクシュアル（Asexual）は，性的指向のカテゴリーのひとつとして，その概念が定着しつつある．また，アセクシュアルに関する主要な研究は 2000 年以降行われるようになった（Bogaert 2004）．しかしながら，アセクシュアル研究のほとんどが欧米諸国で行われたものであり，日本での研究実績はほとんど見られない．さらに，アセクシュアルに関する人口調査では，当事者の多くは女性で，男性当事者の人数が少ないことがわかっている（Bogaert 2004; Hiramori and Kamano 2020）．その要因として，Przybylo(2014) が行ったアセクシュアル男性 3 人へのインタビューでは，アセクシュアル当事者男性が，「男性であること」と「アセクシュアルであること」の両立のしにくさに苦悩する傾向があると示されている．Plzybylo によると，特に西欧社会で暮らす男性は，「男らしさ」という規範と言説によって，仮にアセクシュアルを自認したとしても，

「男らしさ」が欠損した人として社会的排除や孤立を経験する場合があるという．しかしながら，アセクシュアルに関する先行研究全般においては，男性性とアセクシュアルの関連性について十分な議論はなされていない．

そこで，本研究では，他者に性的魅力を感じない性的指向のアセクシュアル当事者，特にその中でもマイノリティとして位置付けられる男性が，アセクシュアルを自認するうえでどのような葛藤を経験しているかという，先行研究でまだ完全に明らかでない課題に取り組みたいと考えた．

第 1 章　アセクシュアル概念の発展と議論

本章では，学術的な研究においてアセクシュアルがどのように捉えられ，研究成果と課題が蓄積されてきているのかを整理を行った．また，アセクシュアル当事者固有の経験やコミュニティ形成について，先行研究からその様相を考察することで，アセクシュアル当事者の実態について検討した．

1-1.　セクシュアル・マイノリティの抵抗運動と構築主義的研究

本節では，そもそもなぜ性的指向や性自認が日常生活の中で規範化され，人の認知や行動に影響を与えているのかひも解くため，LGBTQ の抵抗運動の概要とセクシュアリティの構築に関する議論を整理した．

まず，現在も継承されている LGBTQ の平等と承認を求める活動は，1969 年，アメリカにあるゲイバーに手入れしていた警察に対し，当事者らがカミングアウトを行うことで一枚岩となり抗議した「ストーンウォール・インの暴動」が出発点であった（川坂 2008; 河口 2020）．

他方，セクシュアリティに関する社会学的知見の発展については，赤川（2017）を参照したい．赤川（2017）は，セクシュアリティ研究を構築主義的なものとして遡る場合，「社会や政治によって性が構築されるという，構築の〈受動性〉を強調する議論から，セクシュアリティを生きる人々が社会関係や親密性を作り直し，創造していくという構築の〈能動性〉を重視する議論への転換」がみられると論じている（赤川 2017: 7）．カミングアウトを通したセクシュアル・マイノリティの抵抗運動が前者とするならば，同性婚に関する訴訟が行われたり，セクシュアリティの多様性が謳われたりするようになった現代は，後者の「社会関係や親密性の作り直し」の過程であると考えられる．また，それまではセクシュアル・マイノリティのなかでも性愛が関係性構築の前提とされていたが，アセクシュアルの概念は，そこに性愛や恋愛の感情を介さないという新たな価値観をもたらしたとも捉えられる．

1-2.　アセクシュアル概念の発展と定義

本節では，2000 年以降に行われるようになったアセクシュアルの主要な研究についてまとめた．学術的な研究が行われる以前，アセクシュアルの特徴は性欲が「欠如」しているといったように，病理的な観点で捉えられていた．しかし，研究が蓄積され，アセクシュアル当事者同士のコミュニティ形成が始まったことで，少しずつその認知が深まっていった．

1-3.　強制的性愛概念の概要とジェンダーの関連性

アセクシュアルに関する研究の発展は，性的指向や恋愛的指向を区別して捉えたり，アセクシュアル当事者におけるジェンダー差に関して指摘されたりするなど，当事者内の多様性にも着目するきっかけとなった．そして，アセクシュアルのアイデンティティを確立し共有することは，それを通じて社会における性の規範性の問題を可視化させる側面もあると議論されるようになった．アセクシュアル研究の文脈では，そういった規範性を「強制的性愛」（compulsory sexuality）と呼ぶ．そして，強制的性愛に基づく規範は，アセクシュアル当事者に周囲との価値観の違いを感じさせるだけでなく，例えば性欲がないことを「女性らしさ」と結びつけさせたり，男性は性的に活発であるとイメージさせることで，性的欲求を抱かない男性を阻害したりするなど，ジェンダーに基づく規範にも影響を及ぼしている．

第 2 章　「男性」とアセクシュアリティ

第 2 章では，第 1 章で明らかとなった，アセクシュアルの自認とジェンダーの関係性と男性当事者の少なさについて，その要因がどこにあるのか明らかにするため，男性性という概念に着目した．

2-1.　男性性に関する問題の所在

本節では，男性研究がどのような変遷をたどってきたのか，そして，そのなかで「男性」の何が問題にされてきたのか検討した．

男性性とは，「男性と性別判定された人に割り当てられ期待される性格・行動・態度」（江原 2012）と定義される．この概念は，男性研究が発展する過程で，男性内の多様性が浮き彫りにされたことで，より議論されるようになった．例えば，セジウィッグが男性同士の連帯を論じた『男同士の絆』では，同性同士の親密な絆が「ホモソーシャル」と名付けられた（Sedgwick 1985=2001）．さらにセジウィックは，そういった関係性にある人たちは，同性同士の親密さを同性愛と異なるものとして印象づけ，正当化するために，ホモセクシュアルを排除し，異性愛を前提にすると論じた．セジウィックの議論からもわかるように，男性同士の親密さの中には，同性愛の排除，つまり異性愛を規範とする価値観が普遍的なものとして存在している．これは，異性愛的なあり方のみが前提とされている状態を意味するヘテロセクシズムに関連している．そして，このことは，そもそも性的魅力を他者に感じないアセクシュアル当事者にとっては，自身のアイデンティティを揺るがす要因となりうる．

2-2.　アセクシュアル男性の自認と困難：Plzybylo(2014) による研究事例

前節を踏まえ，本節では，本研究の重要文献とも言える Przybylo（2014）によるアセクシュアル自認男性 3 名へのインタビュー調査について，その概要と論点をまとめた．その結果，Plzybylo（2014）によるアセクシュアル自認男性の経験の聞き取りと，1 節で概観した男性研究における問題の所在から，アセクシュアルの特徴が，男性に求められる規範，つまり「男らし

さ」とは相反するものとして捉えられ，当事者男性の葛藤の要因となっている側面があると明らかにな
った.

第 3 章　アセクシュアル自認男性の経験と葛藤の有無

第 3 章では，筆者が行った日本在住のアセクシュアル自認男性 4 名への聞き取りの結果をまとめた.

3-1.　調査対象者のプロフィールと一覧表

	年齢	職業	最終学歴	性自認	性的指向	インタビュー実施日
A	20 代	会社員（一）	大学院	男性	エース	2022/09/25
B	30 代	行政書士	大学中退	男性 ジェンダークィア	アセクシュアル アロマンティック クワロマンティック	2022/10/05
C	30 代	会社員（建築関係）	大学院	男性の身体に違和感はない	アセクシュアル	2022/10/08
D	30 代	会社員（食品関係）	高校	男性	アセクシュアル デミセクシュアル	2022/10/14

3-2.　自認のきっかけと強制的性愛への違和感

本節では，アセクシュアル自認男性がどのように自認に至ったのか，そしてその過程でどのような価値観に対する違和感を抱いてきたのかを比較した．その結果，当事者男性がアセクシュアルを自認するまでに，周囲の恋愛や性愛に関する価値観に何かしら違和感を持った経験があるとわかった.

3-3.　パートナー願望

今回聞き取りを行ったアセクシュアル自認男性のうち 2 名が，将来的にパートナーを持ちたいという希望を持っており，マッチングアプリに登録するなどといった具体的な行動に移っているとわかった．なお，他 2 名は，婚姻関係に比較的消極的なイメージや疑問を持っていた．しかしながら，パートナー願望を示した C さんは，恋愛関係ではなく友情に近い関係を望むなど，その願望が必ずしも異性愛規範や現存の婚姻制度に依拠するものではなかった.

3-4.「男らしさ」への葛藤

今回聞き取りを行った当事者男性のなかで，B さんと C さんは「男らしさ」やジェンダーに対

する葛藤の経験を語った．まず，B さんは家族からの影響で，「男らしくあれ」という考え方や完璧主義的な教育に順応すべく生活をしていたものの，それらが最終的に葛藤や苦悩の要因になったと語った．そして，C さんは，日本社会に男らしい身体的特徴や精神力に誇りを持つ男性がいる一方で，自身がそういった価値観に共感できず，疑問を持っていたという．さらに，C さんは，自慰行為で性的興奮を感じたとき，自分が男性であること，さらにそれが暴力的に感じることがあると述べており，そういった感じ方からも，男らしさに決して良いイメージを持っているわけではないとわかる．なお，A さんと D さんに関しては，特に男性性に対する嫌悪感を示すことはなかった．

3-5.　カミングアウト

周囲に自身のセクシュアリティを伝えているかどうかについて，A さんと C さんはほとんどの人に伝えていないと話した．また，B さんは，相手に尋ねられた場合は，自身が理事を務める，アセクシュアル当事者の交流会や講座を開催する NPO 法人の話や，以前自身が取材を受けたインタビュー記事を紹介することがあるという．なお，D さんは，家族を含めほとんどの人にカミングアウトをしている．

また，A さんや C さんは，アセクシュアルについてカミングアウトはしていないが，「自分の振る舞いや話ぶりを見て，周囲が自発的に恋愛や性的な話を避けてくれていた」と述べた．

3-6.　アセクシュアル・コミュニティへの参加

本節では，アセクシュアル自認男性が，当事者同士の交流会や集まりに参加経験があるか，そして，当事者同士でどのような話題が出る傾向があるのか比較した．その結果，4 名全員がアセクシュアルの交流会に 1 回は参加経験があり，当事者同士の集まりに関心を持っていたことが明らかになった．また，交流会で話題になるトピックには，恋愛や結婚に関するものが多く，特に当事者女性同士で話が盛り上がる傾向があるという．その一方で，男性から出てくる話題は，女性よりも「幅が狭い」傾向があるとの意見もあった．

第 4 章　アセクシュアル自認男性の葛藤

本章では，アセクシュアル自認男性へのインタビューから，第 1 節ではアセクシュアルのアイデンティティを持つことの意義，第 2 節ではアセクシュアル概念とも根強い関係性を持つヘテロセクシズム・強制的性愛に関する規範が，当事者男性たちにとってどのように影響を与えているのか考察を行った．そして第 3 節では，本研究の主題でもある，当事者男性が「男らしさ」をどのように捉え内在化しているのか，彼らの葛藤経験に焦点を当て検討を行った．

4-1.　自認過程とコミュニティ参加にみる性的指向としてのアセクシュアルの役割

当事者男性の自認のきっかけについて比較したところ，アセクシュアルの自認にいたる第 1 段階として，周囲の価値観に対して疑問や違和感を抱く経験があると明らかになった．また，今

回は調査対象者の条件と人数が限られていたため，アセクシュアル当事者が自認に至るまでに同じような経験をするのかは不明瞭であるが，筆者が聞き取りを行った当事者男性は，強制的性愛に基づく規範を，アセクシュアル特有の経験として認識しているとわかった．

4-2.　不可視化されたヘテロセクシズム

アセクシュアル自認男性の経験からは，日常生活でいかに恋愛，特に異性愛が普遍的なものとして認識されているのかが読み取られた．例えば，友人関係にも関わらず，その相手と親密そうに交流をしていると，周囲から恋愛関係だと思われたり，「彼女がほしい」「付き合っている人いないの？」など，恋愛願望がある前提で話が進められたりするなどのエピソードが出てきた．これらのエピソードは，まさにヘテロセクシズムの存在をあらわにしている．そういったヘテロセクシズム，そして強制的性愛に基づく規範が不可視化されている社会では，性行為を望まない人が性的被害に遭う可能性も考えられ，恋愛や性愛が当たり前のものとして認識されることの問題点として挙げられる．

4-3.　アセクシュアル自認過程における男性性への葛藤

今回行った聞き取りからは，男性性への葛藤を経験したことが，アセクシュアルの自認に至る要因のひとつになっているとは限らないことがわかった．しかし，これらの結果からは，調査前には想定していなかった課題も明らかとなった．例えば，西洋圏で暮らす男性とアジア圏で暮らす男性に何等かの文化的な差異が存在する可能性があること，そして，男性というジェンダー規範についても，強制的性愛やヘテロセクシズムと同様に不可視化されていることである．後者については，性的な事柄への関心がないことが「草食」「奥手」などの性格に結びつけて捉えられている可能性も示唆しており，アセクシュアル当事者への偏見や無理解につながる可能性も考えられる．

おわりに――結論と今後の研究の展望

本調査からは，研究の限界点もいくつか明らかとなった．まず，調査対象者を十分に確保することができず，アセクシュアル自認男性をとりまく諸問題について取り上げるのには限界があった．例えば，今回調査を行った対象者は，4 名全員が 20 代と 30 代という比較的若い世代に留まった．当事者男性の経験について，そして現代日本における男性性の諸相についてより具体的に明示するためには，より広範な世代への質的研究が必要となる．

また，第 3 章 4 節で触れた，アセクシュアル当事者のパートナー願望に関する語りからは，アセクシュアル当事者のライフプラン設計に関する質的研究の少なさとその必要性を再認識することとなった．というのも，該当の節でも触れたように，今回の調査では 4 名中 2 名の当事者男性がパートナー願望を語った．しかし，「男性のパートナーを選ぶと周囲から不自然に思われるから」という理由で女性のパートナーを希望したり，パートナーと結婚するとなった場合，アセクシュアル当事者同士での婚姻関係であることは公表しないという意向を示すなど，パート

ナー関係の理想の中に「周囲からどのように見られるか」という意識があることが読み取れた．アセクシュアル当事者がパートナーを作ることを希望し，その相手と過ごすための将来設計をする際にどういった願望を抱くか，あるいはどういった点を懸念するのか検討することで，今回の調査では明らかにできなかった，アセクシュアル当事者の考える「親密性」について考察を深めることができる．アセクシュアル当事者のライフプラン設計と，それに見る親密性の変容については，今後の研究課題として検討を重ねていきたい．

［文献］

赤川学，2017，「構築された性から構築する性へ」『現代社会学理論研究』11: 4-13.

Bogaert, Anthony F., 2004, “Asexuality: Prevalence and Associated Factors in a National Probability Sample,” *Journal of Sex Research*, 41(3): 279-87.

江原由美子，2012，「社会変動と男性性」目黒依子・矢澤澄子・岡本英雄編『揺らぐ男性のジェンダー意識――仕事・家族・介護』新曜社，23-39.

Hiramori, Daiki and Saori Kamano, 2020, “Asking about Sexual Orientation and Gender Identity in Social Surveys in Japan: Findings from the Osaka City Residents' Survey and Related Preparatory Studies,” *Journal of Population Problems*, 76(4): 443-66.

河口和也，2020，「性的マイノリティの抵抗の歴史とその拡がりの可能性――ニューヨーク，ストーンウォール・インの暴動の事例から」『広島修大論集』60 (2): 19-36.

川坂和義，2008，「『カミングアウト』の困難」*Gender and Sexuality: Journal of the Center for Gender Studies, ICU*, 3: 59-76.

Przybylo, Ela, 2014, “Masculine Doubt and Sexual Wonder: Asexually-Identified Men Talk About Their (A)sexuality,” Karli June Cerankowski and Megan Milks eds., *Asexualities: Feminist and Queer Perspectives*, London: Routledge, 225-46.

Sedgwick, Eve Kosofsky, 1985, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, New York: Columbia University Press.（上原早苗・亀澤美由紀訳，2001，『男同士の絆――イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会.）

吉岡真梨子，2019，「Asexual であるという自覚はいかにしてなされ自己受容されるのか？――ライフストーリー・インタビューによる事例から」『学習開発学研究』12: 61-70.